The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オリエンタリズム的歴史観の中で保護される「伝統」: アレックス・カー『犬と鬼』における日本文化論を中心に
Author(s)	須田, 風志
Citation	大阪大学言語文化学. 2005, 14, p. 157-169
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77912
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オリエンタリズム的歴史観の中で保護される「伝統」
—アレックス・カー『犬と鬼』における日本文化論を中心に—*

須田　風志**

キーワード：オリエンタリズム、伝統、多様性

This paper discusses Japanology in *Dogs and Demons* (2002) written by Alex Kerr. Kerr describes that, although the superior essence like "love of nature" is inherent in Japanese traditional culture, the culture is disappearing. Then he claims that Japanese tradition should be protected and predicts that through the protection Japanese society will grow healthy.

This work was evaluated affirmatively in Japan. After the collapse of Japan's "bubble economy", a lot of works which represent Japan as the negative nation-state have been produced and consumed. Against such a social background, this work probably attracted readers who have nationalistic nostalgia for the superior past essence.

However, *Dogs and Demons* is constituted around the Orientalistic view of history: the Occident is situated at the top of cultural development and the Orient is developing. Furthermore, according to such a view, the Orient is represented as what cannot reach the top for its own essence. Accordingly, Kerr suggests that Japanese society cannot grow healthy without westernization of Japanese culture. As a result, the work contradicts itself. That is, on the one hand the work praises the essence of the Japanese culture, while on the other hand despising it.

To clarify the above, this paper analyzes how Kerr claims the preservation of Japanese tradition, and then points out the reason why his work results in the contradiction. Following these analyses, finally this paper suggests that it so happens that the Orientalistic view of history includes nationalistic nostalgia for the Japanese tradition within its own worldview.

---

* "Tradition" Protected by the Orientalistic View of History: Japanology in Alex Kerr's *Dogs and Demons*(SUDA Kazashi)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1　はじめに

古くから、日本の社会制度、日本人の思考様式・行動様式ないし「国民性」、日本文化について述べたテクストは多数織り成されてきたが、それらが大量に生産・消費された時期として、1960年代以降を挙げることができる。この趨勢は日本文化論ブームと呼ばれるものであったが、そのブーム自体は今や下火になっている。吉野（1997）が指摘するように、1980年代以降、日本文化論に対する対抗的な言説[1]がブームの火消し役として登場し始めた(134)。そして現在、それら批判的言説との絡み合いの中で、「大衆消費財」（ベフ54）としての日本文化論の市場価値は下落した観を呈しているのである。

確かに、今日においては、日本文化論という名の下に、著作物が生産されることは少なくなりつつある。だが、このことは日本文化論的な言説の消滅を意味してはいない。日本文化論的な言説は、さまざまなテクストの織り糸となりながら、今日においても連綿と継承されているのである。その一例として、アレックス・カー（Alex Kerr）による『犬と鬼』(2002)[2]を挙げることができる。『犬と鬼』は2000年代に入ってから出版されたテクストであるが、そこでの議論は、1980年代後半以降に台頭した「ジャパン・バッシング」的な言説を織り糸としながら編制されている。このことは、カーが、ジャパン・バッシング論の代表的著作、カレル・ヴァン・ウォルフレン（Karel van Wolferen）『日本／権力構造の謎』（1989）を、何度となく引用していることからもわかる（例えばpp. 13、44)。

『日本／権力構造の謎』に代表されるジャパン・バッシング論は、多くの論者が指摘しているように（例えばド・バリー（1996)、ミヨシ（1996))、極端にオリエンタリズム的なものであった。そして、その論を引用する『犬と鬼』もまた、オリエンタリズム的な色彩を色濃く残している。しかし、日本のメディアにおいて、これら二つの著作は対照的な評価を得ている。『日本／権力構造の謎』は、多くの論者から西洋中心主義的であるとの批判を受け、その結果、「ジャパン・バッシング」のレッテルを貼られたという経緯を持つ。それとは対照的に、『犬と鬼』は、「日本の現実の批判的指摘としてまったくそのとおりと言わざるを得ない」（村井169)、「その分析の明快さに目が覚める思いであった」（櫻井31)、などの肯定的評価を全面的に得ており、それに対する批判的分析は見受けられない[3]。

---

[1] 本稿においてはPennycook（1994）に従って、「言説」を「社会組織や慣習に埋め込まれた知の体系であり、知／権力の様々な関係の集合体」（Pennycook 104）と考える。

[2] 日本語版の『犬と鬼』は、*Dogs and Demons*（2001）をオリジナルとしているが、カー自身も述べているように、日本語版には大幅な加筆修正がなされている。例えば、日本語版の第2章「治山・治水―災害列島」（pp.35-53）と第12章「総決算の日―借金」（pp.263-275）は原著には収められていない。また、本稿では、『犬と鬼』の日本における評価にも着目している。これらの点を踏まえ、本稿においては、出典を日本語版のみに限定する。

この評価の違いは、90年代後半以降、「日本の経済的・社会的消耗」（岩渕 266）という認識が広く共有されていたことに起因するだろう。バブル経済の崩壊、オウム真理教に関する事件などがメディアに登場し、その原因が日本社会の構造ないし日本文化に帰せられていく。こうして、日本社会を否定的に表象するテクストが、数多く生産され、同意を伴いながら消費されていくことになる。このような背景の下で、『犬と鬼』もまた、肯定的評価を得ることになったと言える。

また、岩渕（2001）が指摘するように、以上の認識が「日本が見失った『本来』の自分自身を取り戻そう」というノスタルジアを喚起した（266）という点も見逃してはならない。このノスタルジアも、『犬と鬼』の評価を左右したと言える。例えばカーは、日本の伝統文化に内在する「自然を愛でる心」（42）を賞賛し、その「心」の喪失を憂えている。自然環境保護、「伝統」や文化的「多様性」の尊重という「同時代的な関心事」を織り込みつつ、日本伝統文化の優位性を主張し、その保護を訴えているのである。そして、「本来の姿」（382）を回復させることが、日本社会にとっての「今世紀の課題」（383）であると説く。「優れた伝統」を復活させることによって、日本の社会的消耗を癒やす――このような主張が、積極的な日本像を再構築したいと願う読者を魅了し、『犬と鬼』の肯定的評価を導き出したとは考えられないだろうか。

ここで肝要なのは、上記のようなノスタルジアは、根本的な矛盾を抱え込む可能性を有しているという点である。その矛盾とはすなわち、一方で日本文化の優位性を説きつつ、他方ではその評価を逆転させ、日本文化を本質的に劣ったものとして表象するというものである。この二重性は、日本文化の「特殊性」の主張と西洋的な「普遍性」の主張とが、実は表裏一体の関係にあるために生じたと言える。

多くの論者が指摘しているように、日本文化論的議論においては、「日本＝日本人＝日本文化＝日本語」[4]という同一性と、その特殊性を構築する試みが、その大勢を占めている。そして、その特殊性の構築は、西洋の普遍性を確立することを伴ってきた。すなわち、特殊性とは、その語の意味からして、何らかの普遍性ないし一般性を対照項として伴っているのだが、日本文化論的議論は、その普遍性を西洋と同一視してきたのである。こうして、「日本のユニークさと同一性は、西洋という普遍的場に突出した特殊な対象というかぎりでのみ与えられる」ことになる（酒井 23）。

そして、この表裏一体の関係のゆえに、日本社会・文化の現状を否定的に評価する議論においては、西洋的な普遍性が賞賛される傾向にある。また逆に、日本的特殊性、な

---

[3] また、同じ著者による『美しき日本の残像』は、1994年に新潮学芸賞を受賞している。その内容は、『犬と鬼』のそれと重複しているが、自伝的な色彩が強く、日本文化について理論立てて論じたものとは言いがたい。この点を考慮し、本稿においては、『犬と鬼』を主題的に扱う。

[4] ここで用いている「＝」は、各々の境界線が重ね合わされていることを意味している。

いしその典型とされる「伝統的日本文化」を肯定する言説は、西洋的普遍性に対する批判ないし非難を伴うことになる。だが、「本来の姿」を取り戻したいとするノスタルジアは、「伝統的日本文化」を賞賛しながら、日本文化の現状を批判している。このため、矛盾をはらむことになるのである。

『犬と鬼』における議論にも、以上のような矛盾を見て取ることができる。だが、『犬と鬼』は、「西洋＝絶対的な普遍性」対「日本＝絶対的特殊性」という図式を、単純に再生産しているわけではない。先にも述べたように、カーの主張には、文化的「多様性」の尊重というテーマが織り込まれている。このため彼の論は、一見すると、西洋文化も日本文化もそれぞれ文化的多様性の一構成要素であり、この意味において、西洋文化と日本文化とは共に、相対的に特殊なものに過ぎないと主張しているようにも思われる。けれども、ここで見逃してはならないのは、『犬と鬼』は、その文化的多様性を「発見」し、それを「尊重」する視座ないし思考様式を、西洋的なものとして表象している点である。この戦略的な論法によって、『犬と鬼』における議論は、西洋・日本文化の相対的特殊性を説く一方で、西洋的な視座の普遍性を確立してもいるのである。

以上の点を明らかにするために、次節では、『犬と鬼』において、伝統的日本文化の保護がいかにして訴えられており、そこにどのような矛盾がはらまれているかを見ていく。続く第3節においては、この矛盾が、西洋を文化的「進歩」の頂点に位置づける歴史観、すなわちオリエンタリズム的な歴史観の中で、日本の伝統文化の保護を唱えているがために生じていることを明らかにする。そして最後に、2・3節における分析を踏まえ、カーの目指す文化的「多様性」の尊重に、どのような問題性がはらまれているかを考察する。

2　『犬と鬼』における矛盾

『犬と鬼』の主題は、日本において「真の伝統文化」[5]が崩壊し、「フェイクな『文化』」[6]（170）がそれに取って代わり、大量に生産されていることに対する批判である。カーによると、「伝統日本文化を形成するものすべてに、自然は大切なテーマだった」が（21）、その「自然を愛でる心」（37）は現代では失われている。第二次大戦以降の復興期に「『埋める・建てる』的精神が根をおろした」（37）。この精神は「巨大で金のかかる人工物は無条件にすばらしいという考え方」であり、今となっては「文化の主流になってしまった」考え方でもある（37）。こうして、「世界でも有数の美しい自然環境」（6）は破壊さ

---

[5] カーは、『美しき日本の残像』において、歌舞伎、生け花、書道、茶道などを伝統的日本文化として紹介している。このことからも、カーにとっての「真の伝統文化」が、典型的に「日本らしい」ものを意味していることがわかる。

[6] カーは、「フェイクな文化」の典型として、京都タワー（170）、新京都駅舎（186）、ハウステンボス（184）などを挙げている。

れ、古都京都に代表される「アジアで最も豊かな文化遺産」(6) も、「自国の文化とは何の関係もない、欧米のオリジナルの気の抜けたまがいもの」(184)や、「みすぼらしいか無機質か、その両極端のどちらかしかあり得ない」都市景観に取って代わられている (205)。カーは、この状況を日本文化が「文化の病」(38) にかかっていると評し、その治癒こそが日本社会にとっての「今世紀の課題」(383) であると訴え、その論を閉じている。[7]

以上の論からもわかるように、カーの主張は、日本文化論的な議論を踏襲したものだと言える。伝統的日本文化の特殊性に「自然を愛でる心」を探し求め、その日本的な心と自然環境保護という「今日的な課題」とを短絡させることによって、日本文化の優位性を主張する。このような議論は、日本文化論の系譜の中で何度となく登場している(例えば梅原 (1990))。

では、『犬と鬼』を含め、これらの伝統文化に関する議論は、どのような問題性をはらんでいるのだろうか。

ホブズボウム(1992)および多くの論者が主張しているように、「伝統は創り出される」(ホブズボウム 9)。カーのいう「伝統文化」についても同様である。「伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとするものである」が (ホブズボウム 10)、その歴史的連続性とは、現在的な視座からイデオロギー的に構築される。すなわち、「歴史の記述が可能になるためには、後の時点に立って過去を振り返り、そこから出来事を選択・配列する構造化の過程が必要になる」(浅野 46)。だが、その選択的な構造化は、社会的・歴史的な拘束を逃れた視座、すなわち超越的視座からなされるものではない。『犬と鬼』にもこの点は当てはまる。

多くの論者が明らかにしてきたように、「国民国家日本」という「共同体」は、明治期に入り、「国語」「日本語」「標準語」の同一性の確立と平行して、「想像」されるようになった (イ i-iv)。にもかかわらず、カーは、明治以前に創り出された有形・無形の文化財、明治以前に存在したとされる思考様式 (序破急・残心、清貧など) をすべて「伝統的日本文化」の範疇に収めている。すなわち、現在の国民国家日本の境界線を過去に投影することを通じて、その境界線内での出来事をすべて、「日本＝日本人＝日本文化＝日本語」の歴史的変遷として物語[8]化しているのである。こうして、カーの言う「伝統文化」もまた、「国民国家日本」の人為性を隠蔽すると同時に、その同一性を象徴するものとして機

[7] カーによると、『犬と鬼』の「犬」は、「真の伝統文化」の喩えであり、「鬼」は「フェイクな文化」を指している。その意味するところは、「真の伝統文化」は、犬のように身近な存在であるために、「正確に捉えることが難し」く (12)、逆に、「派手で大げさな想像物である鬼」＝「フェイクな文化」は、容易に生産され得る (12)、というものである。

[8] 本論文においては、ダント (1989) に倣い、「物語」とは「ある出来事を別のものと一緒にし、またある出来事を関連性に欠けるとして除外するような、出来事に負荷された構造」(161) だと考える。

能することになる。

また、以上のような虚構的な連続性が、文化の「正統性」の有無を論じる際にも用いられることになる。カーは、伝統的な日本の文化を保護することを訴えると同時に、現代における日本文化ないし「大衆文化」を、「フェイクな文化」として非難している。ここで、「真／フェイク」の区分の基準となっているのは、明らかに、過去との連続性の有無である。

ではなぜ、「正統的な日本伝統文化」と「偽りの現代文化」との間に断絶が生じたのか。多くの論者は、伝統的日本文化の崩壊を、外部からの圧力によって引き起こされたものとして説明し、「近代化＝西洋化」をその圧力として表象してきた。しかし、カーはこの解釈を退ける。

カーによると、日本は明治以降、「和魂洋才」、すなわち「日本の精神で西洋の技術を使いこなす」という考え方の下に、近代化を推し進めてきた(45)。このため日本は、「文化的アイデンティティを失わずに近代化に成功した」のであり（45)、それゆえ、日本は「近代的ではあるがまったく西洋的ではない」ことになる（44)。

このように、『犬と鬼』の議論においては、「近代化」と「西洋化」とが明確に区分されている。そしてカーは、その区分を通じて、「近代化」を単なるテクノロジーの流入として描き出しているのである。近代化が文化の西洋化を意味しないのであれば、「文化の病」の原因を、西洋という外部からの圧力に帰することはできない。したがって、「文化の病」は、必然的に、内部の属性によって導き出されたことになる。すなわち、「洋才は手段にすぎ」ず、「動機は和魂にある」（45）ということになるのである。

カーによると、日本は文化的アイデンティティを維持しつつ、近代化に成功したが、「この成功の中に危険の種があった」（45)。なぜなら、「「和魂」は必ずしも「洋才」にうまくはまらない」からである（45)。「うまくはまらない」とはすなわち、「動機＝和魂」と「手段＝洋才」の結合が、「極端に破壊的な結果をもたらした」ことを指している。そして、「極端に破壊的な結果」の例として、「第二次世界大戦」や「今日の日本の環境破壊」が挙げられている（45)。では、「動機」としての「和魂」は、いかなる問題を含んでいるのだろうか。彼はこの問いに、「トータルコントロール」なる概念を用いて答えている。

> 日本の文化危機が、「伝統社会」対「西洋技術」という単純な問題であれば、もっと簡単に解決しただろう。しかし、危険の種は皮肉にも伝統文化の中にもある。芸術愛好者は、石庭、盆栽、生け花などを生んだ「自然を愛でる心」を称える。しかし、見過ごされていることだが、そういう日本の伝統的アプローチは自然に対する

自由放任主義とは対極にある。これらの芸術は、何世紀にもわたって国を支配した武家社会の強い影響のもと、枝葉末節に至るまでトータルコントロールを求めてきた。

トータルコントロールは日本の長所のひとつで、茶道や能を生み出したし、名高い組み立てラインの品質管理もその産物だ。欧米人には当然と思えるラフ感覚（原文ママ）、日本には存在する余地がない。しかし、トータルコントロールは諸刃の剣だ。それが近代テクノロジーと結びつき、そして自然環境へ向けられた時には、無惨にして致命的な影響を及ぼすのだ（42）。

すなわち、すべてを完全に制御しようとする日本的な思考様式が、近代テクノロジーないし西洋技術の誤用を導き出しているのであり、西洋技術そのものは、中立的な道具に過ぎない。このようにカーは、「文化危機」の原因を、西洋という外部にではなく、日本文化の属性に求めているのである。

同様に、巨大なモニュメントに代表される「フェイクな文化」もまた、伝統的思考様式、すなわち「和」と「序破急・残心」によって導き出されたものとして説明されている。

カーによると、「『和』という伝統的な理想」は、日本における「逆徳精神（Opposite Virtues）」であるとされる（238）。逆徳精神とは、簡略化して言うと、「それぞれの国が最も誇りにしている美徳で、実はその国に最も欠けているもの」のことである（238）。したがって、日本において「和」が尊ばれるのは、「バランスを失って極端に突っ走る傾向が強いという、まさにそこに理由がある」ことになる（238）。そして、「極端に突っ走る傾向」は、伝統芸能における「『序破急・残心』というリズム」との関連性の中で捉えられている（239）。序破急・残心とは、カーの説明によると、「ゆっくり、速め、速く、停止」を意味しており、さらに「停止」は「破滅」と同義である（239）。このリズムのために、「日本はどうしても「破」で止まれ」ず、「そのまま「急」へ向かい、その後は破滅、すなわち「残心」に至ってしまう」（239）。

すなわち、日本の伝統的思考様式には、偏執的に極端を志向する傾向があり、それが今日においても受け継がれているとされているのだ。そして、その思考様式が西洋技術を誤用することによって、極端に巨大で環境破壊へとつながるモニュメントが極端に多く建築され、それに伴い、伝統文化は崩壊している――こうして日本文化は病んでいくと、カーは主張している。

カーの主張が矛盾していることは明らかである。繰り返しになるが、『犬と鬼』は、自然環境保護を志向するものであるか否かを、文化の優劣の判断基準としている。そして、伝統的な日本文化は「自然を愛でる心」を内在させているために優れているとされ、優

れているからこそ、その保護が訴えられているわけだが、以上の価値判断は、同じ論の中で覆されてもいる。カーが他方で主張しているように、日本伝統文化が自然環境を破壊する「動機」を潜在的に持っているのであれば、日本伝統文化は、カー自身の提示する基準に沿うなら、劣ったものであることになる。そればかりか、伝統的日本文化を保護することに対して、何らの正当性も与えられなくなってしまう。このように、『犬と鬼』における論は、自らがその保護を訴えている伝統文化を、伝統文化の崩壊、さらには自然環境破壊の決定的な要因として提示するという、根本的な矛盾を抱えているのである。

さらに言えば、彼が前提しているように、「トータルコントロール」、「和」、「序破急・残心」などの伝統的思考様式が、現代文化においても見受けられるのであれば、伝統文化は今日においても連綿と受け継がれていることになる。すなわち、伝統文化の崩壊という主張自体が成り立たなくなってしまうのである。

以上の矛盾は、先にも述べたように、カーが伝統文化の崩壊の原因を、「外部」ではなく「内部」に求めたことに由来する。そして、ここで肝要なのは、カーが恣意的に原因を内部に帰したわけではないという点である。すなわち、それは、『犬と鬼』における議論がオリエンタリズム的な歴史観の中で展開されているがために導き出された帰結なのである。この点を次の節において詳述していく。

3　『犬と鬼』におけるオリエンタリズム的歴史観

先述したように、『犬と鬼』においては、「近代化」という概念は、必ずしも「西洋化」を意味しないものとして把握されている。この操作を通じて、カーは、「近代化」を中立的な概念として、さらには普遍的な歴史的推移として提示しようと試みる。

カーによると、「現代文化史を大きく三段階に分けるとすれば、前工業化時代、工業化時代、そして脱工業化時代」という区分が成り立つ(38)。そして、すべての国民文化は以上の三段階を経て「進歩」していくことになる。まず、第一段階の前工業化時代においては、「人々は自然と一体になって生きて」おり、この時代は「欧米では二〇〇年ほど前に終わり、東アジアの多くの国々ではつい二〇年前に終わったばかり」だとされる(38)。第二の工業化段階は「急激な近代化の波が起きる」時代であり、人類と自然の調和は乱れてしまう(39)。その調和を回復するのが、第三段階の脱工業化時代である。この段階において、「社会は新しい『近代』像への移行を」果たす(39)。そして、この「新しい『近代』像」においては、「人々は一定水準の快適さを獲得し」ながら、自然環境および文化的多様性の保護を志向するに至る。すなわち、第三段階は、テクノロジーが「自然や伝統文化と再び結び」ついた理想的な状態なのである(39)。

そして、カーによれば、日本は、「進化論」的な「現代文化史」の第二段階に留まって

いるとされる。「残念ながら日本の場合、『脱工業化』への準備はすべて整えてあるのに」、「その移行が阻止されている」(39)。すなわち日本は、「古くて自然のものは『汚い』『迷惑』、それどころか危険だと考える」、「『発展途上国』時代の後遺症」に苛まれているのだ（39-40)。このため日本においては、テクノロジーと自然および伝統文化とが調和していないのである。

以上のように、カーは、「近代化」を普遍的な歴史的推移と捉え、各々の国民文化は「近代化」を経てこそ、理想的な発展段階に到達し得ると主張する。この点は次のことを含意してもいる。すなわち、各々の国民文化は、文化の「西洋化」を経験するのではなく、むしろ、「近代化」がもたらしたテクノロジーによって、その伝統文化は保護される[9]。言い換えれば、各文化は、自らの相対的特殊性を保持しつつ、理想的な発展段階まで進歩するのである。

では、なぜ日本は近代化に失敗し、欧米諸国は成功したのだろうか。近代化は中立的なものであるばかりか、不可欠な推移でもある。ならば、それに失敗した原因は、論理的に、日本的特殊性、つまりは日本伝統文化の属性に帰せられることになる。そしてその属性は、同語反復的に、理想的な発展段階を志向しないものとされている。つまり、伝統的日本文化には自然環境および文化的多様性を保護しようとする志向性が内在していない。そもそもこの志向性を内在していないために、日本文化は、何らかの外的圧力もなしに、理想的な発展段階に至ることはない —— カーはこのように説明しているのである。

上記のことを裏返せば、欧米先進国の文化は、理想的な発展段階を志向する本質的属性を有していたがために、近代化に成功したことになる。この同語反復的な説明図式を採用したために、欧米先進諸国の文化とその他の文化との段階的な格差は、両者の文化的本質の優劣関係に還元されてしまっているのである。

以上のように、伝統的日本文化の保護の訴えは、オリエンタリズム的な歴史観に回収されてしまっている。

すなわちカーは、各々の国民文化は自らの持つ相対的特殊性ないし伝統文化を保護しなければならないと唱え、その観点から、日本文化は西洋文化に比べ、伝統文化を十全に保護していないと批判する。そして、保護の度合いの差を、オリエンタリズム的な歴史観の中で発展段階的な格差として表象する。この段階的な格差を正当化するために、西洋文化と日本文化との本質的な優劣関係が持ち出される。こうして、日本伝統文化は

---

[9] ここでカーが保護の対象として挙げているのは、伝統的建築物などの、いわゆる「文化財」である。このようにカーの論において、伝統的「文化」の保護が訴えられる際には、「文化」という語が「伝統的な文化財」を意味するものとして用いられる傾向にある。

保護の対象から非難の対象へと転じていくのである。

このような論法が展開されるにつれて、西洋文化は相対的に特殊なものとして表象されるのではなく、絶対的な普遍性と同一視されることになる。言い換えれば、西洋文化ないし西洋的な視座のみが文化的多様性を尊重する志向性を内在させており、この点で普遍的だと示唆されることになるのである。

この点をより詳細に見ていくために、以下で、『犬と鬼』が「文化の病」を癒やす術をどのようなものとして提示しているかを見ていく。カーによると、

> 植民地であった国々は、ヨーロッパの官僚制度を受け継いでおり、それが香港、シンガポール、クアラルンプールといった美しい都市が発達した要因の一つとなっている。また、こうした歴史と別に、観光という要素もある。活発な国際観光業があると、外国人が喜ぶために、伝統と新しいものをうまく調和させた施設を造ることになる。これによって、巧妙な今昔折衷の技術が生まれてくる（176-177）。

彼によると、「世界のどこでも地元の人より」「外国人が伝統文化を評価する場合が多い」。そのような「外国人」が、地元の人々に「自分たちの遺産を再発見、再創造する情熱を与えている」のである（177）。その例としては、バリ島を愛する「オランダ人、ドイツ人、アメリカ人、オーストラリア人といった幾世代にもわたる外国人居住者」が挙げられている(177)。しかし日本では、「外国人を物理的に隔離したいという『出島の夢』は今も消えていない」(345)。したがって「外国人」は、伝統文化を保護するための活動の機会を与えられないでいる。このため、伝統的な日本文化は失われていくことになる。

> 世界中のどこの伝統文化も、圧倒的な西洋（主としてアメリカ）文化の洪水からいかに身を守るかという問題に直面している。なかには、法制、宗教、社会慣習上の防壁を築いて、外の世界を締め出す道を選んでいる国もある。このようなアプローチの例を研究したければ、日本はいいテストケースである。
>
> ここで大きなパラドックスが見えてくる。防壁を設けたことがかえって裏目に出る。逆説的ではあるが、地元の文化を守るうえで外国人が役に立つこともある。「日本的」なる文化遺産は、その真価を認めることのできる外国人がもっと大勢いれば、もう少しよく保存されていたかもしれない。「国際化」と「伝統文化」は表裏一体のもので、自国の文化と自然をもっと大切にすれば、国際的魅力がより増しただろうし、また、社会を外国人に本格的に開いていれば日本的なものはより健全に残っただろう（352）。

以上の主張からは、「文化の病」を癒すためには、西洋的な視座から伝統文化を「発見」・「創造」し、それを欧米先進国の制度や技術の下で保存しなければならないというメッセージが透けて見える。そして、カーの議論は、「発見」される伝統文化が、「客観的なもの」であることを所与の前提としている。すなわち、「国際的」ないし通文化的に見て、その国独自の「魅力」であり、「真に価値あるもの」なのである。こうして、「西洋＝普遍」という図式が再確立されることになる。各国民文化の特殊性を客観的に発見し得るポジションとは、特殊性を超越した普遍的な視座にほかならないだろう。

以上の流れを追うことで、次のことを読み取ることができる。すなわち、『犬と鬼』における議論は、「近代化」と「西洋化」とを区分することによって論を進めつつ、最終的にはその区分を解消しようと試みている。カーは一方において、近代化は道具としての近代テクノロジーの流入に過ぎず、西洋化を意味しないと主張する。と同時に、他方では、近代テクノロジーは西洋的な視座の下でこそ初めて「理想的に」使用され得るのであり、あらゆる文化は「理想的」な段階へと単線的に進歩しなければならないと説いているのである。理想的で普遍的な発展段階へと至るために、西洋からもたらされた制度・テクノロジーによって、西洋的な視座から仮構された伝統文化を保護しなければならない――この主張は、進化論的な「近代化＝西洋化」論の一変種であるとは言えないだろうか。

4　おわりに

以上2・3節で見てきたように、『犬と鬼』における議論は、大きな矛盾を抱えている。そしてその矛盾は、オリエンタリズム的な歴史観の中で、伝統文化の保護を訴えたために生じていた。すなわち、文化の進歩は自然および伝統文化とテクノロジーの調和によってもたらされるとし、西洋を進歩の頂点に位置付ける歴史観である。この「進化論」的な歴史観においては、日本伝統文化の崩壊を「近代化＝西洋化」という外圧の弊害として表象することはできない。そのため、崩壊の原因は伝統的日本文化の本質に帰せられることになる。こうして、自らが擁護するものを非難するという矛盾が発生するのである。

また、日本的特殊性の本質が、自然・伝統文化と調和し得ないものと規定されたために、日本伝統文化の保護は、西洋的な思考様式によってのみなされ得ると、カーは結論付けていた。簡略化して言えば、『犬と鬼』は、西洋的な視座から「(再) 発見」された「伝統文化」を保護することを奨励しているのである。この主張は、西洋的な思考様式が、文化的な「多様性」を尊重する「政治的な正しさ」に裏付けられていることを暗示している。そして、その政治的な正しさと西洋的な視座とが短絡させられることを通じ

て、西洋文化の相対的特殊性は、普遍性へとすりかえられていくのである。だが、この「多様性」とは何を意味しているのだろうか。

モーリス=鈴木(1999)は、現代のグローバル化においては、「ローカルな伝統をグローバルな知識体系の構造に『フォーマット化』するプロセス」が進行していると主張する(36)。そして、この「フォーマット化」は、「グローバルな統一の押し付け」を意味していないことを強調する(33)。むしろ、このプロセスは、「グローバルな不均質を系統だてる手段、すなわち混沌として統制のない『差異』を、統制の取れた処理可能な『多様性』に変換する手段」なのである(33)。その結果、「多様な種々のローカルな伝統が、同一の基準で相互に比較しやすい形で提示される」ことになる(36)。このようなプロセスが、カーの奨励するツーリズムによって促進されていることは明らかだろう。そして、その結果構築された「多様性」は、マーケットにおいて消費の対象として陳列されることになる。以上のモーリス=鈴木の議論を受けて、岩渕は、「『型』の供給者は依然として西洋に独占されている」ことを確認している(49)。すなわち、「型」の創出は、往々にして、オリエンタリズム的な視座からなされているのである。

カーの議論は、確かに「多様性」ないし伝統的日本文化を尊重しており、それらが損なわれることに対する憤りを表明したものだと言える。それゆえ、『犬と鬼』は、「日本が失った本来の自己自身」を取り戻そうとする、ナショナリスティックなノスタルジアを汲み取り得たのである。しかし、上記の観点からすれば、彼がその保護を訴えているものは、オリエンタリズム的な視座から構築された「統制の取れた処理可能な多様性」のひとつ、言い換えれば、ツーリズム市場に陳列されている、一商品としての伝統的日本文化であると言わざるを得ない。そして、『犬と鬼』においては、伝統的日本文化の保護の訴えが、オリエンタリズム的な歴史観に回収されていた。この展開に、ナショナリスティックなノスタルジアが「グローバル・マーケットにおける多様性の保護」への志向に絡め取られる様を、見て取ることができるのではないだろうか。

引用文献

浅野智彦(2001)『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』勁草書房
イ・ヨンスク(1996)『「国語」という思想』岩波書店
岩渕功一(2001)『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店
ヴァン・ウォルフレン、カレル(1994)『日本／権力構造の謎』早川書房、篠原勝訳
梅原猛(1990)「一神教から多神教へ」『中央公論』第105巻第2号、中央公論社、pp.84-90
カー、アレックス(2000)『美しき日本の残像』朝日文庫
――――――――(2002)『犬と鬼―知られざる日本の肖像―』講談社

酒井直樹（1996）『死産される日本語・日本人：「日本」の歴史－地政的配置』新曜社
櫻井正昭／カー、アレックス（2003）「特集 日本の風景のいま：「犬と鬼」の著者―アレックス・カー氏に聞く」『国立公園』619号、国立公園協会、pp.28-32
ダント、アーサー・C（1989）『物語としての歴史―歴史の分析哲学』国文社、河本英夫訳
ド・バリー、ブレット（1996）「日本バッシング時代における日本研究」酒井直樹／ド・バリー、ブレット／伊豫谷登士翁編著『パルマケイア叢書5　ナショナリティの脱構築』柏書房、加野彩子訳、pp.287-310
ベフ、ハルミ（1987）『増補新版 イデオロギーとしての日本文化論』思想の科学社
ホブズボウム、エリック（1992）「序論―伝統は創り出される」ホブズボウム、エリック／レンジャー、テレンス編『創られた伝統』紀伊國屋書店、前川啓治訳、pp.9-28
ミヨシ、マサオ（1996）『オフ・センター―日米経済摩擦の権力・文化構造』平凡社、佐復秀樹訳
村井実（2003）「書評 犬と鬼―知られざる日本の肖像―」『アガトス』24号、アガトスの会、pp.169-172
モーリス=鈴木、テッサ（1999）「「フォーマット化」される差異―グローバル時代における文化的多様性」『NIRA政策研究』12巻9号、NIRA総合研究開発機構、pp.33-37
吉野耕作（1997）『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会
Alastair Pennycook (1994) *The Cultural Politics of English as an International Language,* London: Longman
Alex Kerr (2001) *Dogs and Demons: The Fall of Modern Japan,* London: Penguin Books